2024 年度 施設の自己評価

☆保育

前年度に続き自分の言葉で保育を語ることを大事にし、小集団で語りあえる場を設け、「もっとはなしたい」「もっと聞いてもらいたい」そんな取り組みをしながら、「こうしたらいいかもね」と子どもに返す事ができる職員集団をめざしてきました。

保育の中で、子どもたちのやりたいことに耳を傾け、そのことをどうしたらかなえられるのか？を日々大切にしている。その中で、年長の取り組みとして、毎年畑をお借りして野菜をそだてているが、今年は「ポップコーンをそだてて映画を観ながら食べたい」とポップコーンを育てる事になりました。

日常生活の中では、好きな遊びを見つけて遊ぶ子どもたちでしたが、収穫をする頃には、映画を観ながら・・・から、劇を見せたい・・・に変わっていった子どもたちでした。自分たちで話を作り、下のクラスの子に見せ、卒園式ではたんぼぼ始まって以来だと思いましたが、指人形を作り、人形劇として保護者の方に見ていただきました。

幼児

たてわりの中では、自分の事を知ってくれているおうちの仲間がいることが、その子にとって安心して生活できる場であり、気持ちを寄せてくれる仲間になっていることを話し合った。

おうちの仲間だからこそ、その子がわかり待つてあげられる。待つてもらえる安心感を話し合いました。

乳児

乳児の中では、一見マイナスに見える姿でもマイナスにとらえるのではなく、大人側が子どもの事を知ろうとしていく中で、持っている言葉の意味を得ていく作業をしていく中で実感の伴った言葉に変わっていく(変えていく)保育が大切だということを話合いました。

0歳ではまず仲間を知り、1歳では仲間とつながろうとする姿をとらえていく事が大切だという事を話合いました。

給食

給食室の実践の中では、子どもに伝えたいことを視覚的にてみることで、子どもたちが自分の事 栄養の事をより身近に感じられるのではないかと話し合いをしました。

たんつく交流

- 子どもたちに本物を見せたいと思っている中で、2024年度は人形劇団『ブーク』をお呼びして、たんぼぼとつくしんぼの子どもたちに作品を観せることが出来ました。当日は0歳の子どもたちからホールに集まり、作品を観ることができ、0歳児も目をキ

ラキラさせて観ていました。公演が終わり、できたらまた子どもたちに観せる機会を作りたいと話しました。

- 子どもの育ちをどう見て、どう寄り添うことがいいのか？寄り添っているつもりでいても、保護者とずれてしまい、職員も保護者も苦しくなってしまうことがあり、若林先生に研修を依頼し、学習する。その中で、「フラット」という言葉がキーワードとなり、「子どもの世界でおとなも対等に生きること」を学んだ。

子ども世界をっともっとよく見てみよう。そう思える研修でした。

また、ベテランを対象とした研修も若林先生を講師に行った。「あらぐさの良さって何？」の間から始まり、「昔はさ～」って話がどんどん出てきて、でもその中でたんつくが向かう方向はどこなのか？はなかなか話しきれなかった。

《自己評価》

「子どもの思いはどこにあるのか？」「子どもの本当の願いは？どこなんだろう？」実践記録から、子ども一人一人の思いや願いを話し合うクラス単位の記録会議や、年2回の総括会議を通じて、子どもの事をもっと知り、子どものおもしろさ、子どもの思いを大人も対等に関わりながら、保育をしていく楽しさを感じ、子どもを見る視点を深めていきたいと思う。